

談義所にて

【談義所】一般的に知られる意味ではなく、金沢市内のとある、古くからある火葬場とゴミ焼却場が近接するその周辺を近隣住民等が慣例として呼ぶ、屋号のような地域限定地名のこと。今は周辺の道路が整備され、山が削られ、区画整理され、火葬場とゴミ焼却場はさらに奥まった場所に隣接・建替えられ、剩え公園や体育館までが造成されて、山林しかなかったその周辺の風景は往時とは一変してしまった。正に今昔の感に堪えない。

近隣住民ではない筆者がなぜ、その場所を古より「談義所」と呼ばれているのかを知るのか。それは近隣高校の応援歌（だったと思う）に「煙棚引く談義所は・・・」の一節があったことを思い出したからである。卒業から来年は35年か、もう校歌は微塵も出てこない（ゴメンナサイ）が、その「談義所」の件は覚えている。その当時のその場所は周囲を山と森に囲まれ、ひっそりしていて、谷地や谷津と分類され得る人目を憚る「火葬場」に相応しい場所・地形であったと記憶する。誰からともなく、そんな人知れず人が近寄らない所とする「お話」を「談義する所」であるからそう名付けられたと聞いた。賢明なる生徒達もうすうす気付いて、無邪気にも「ねえねえ。そこでどんなお話するの」とは誰も聞かない「大人の話」と「密会場所」を示唆していた。往時の面影が全く無い今では、後輩達にとってそのような「由来」は想像するに相当無理があろうし、今時の高校生には子供騙しと理解されるのであろう。今はもう、その「談義所話」などは連綿と継承されていないのだろうし、知る人も校内にはいないだろう。懐かしくも、少し寂しい話であった。

なぜ、そんな話を思い出したのか。それは先日、その場で叔父が茶毘に付されたからである。合掌。（解いて下さい）待合室にて待機している時間に、しみじみとその（談義所の）件を思い出した次第である。今まで何度かお骨を拾うことに立ち会ってきたが、当所で行うのは初めてであった。何の因果か、その「談義所」でお骨を拾うことになろうかとは、夢にも思わなかったが、「談義所」を思い出させた「何か」は強く感じた。

当日参列していた亡くなった叔父と同世代の人々達は、昭和一桁～戦前生まれである。年齢的には所謂「川のほとりに佇む人（々達）」と表現され得るのであろうその人々達、今回は川縁からの「お見送り」に来られたことに間違いはないのだが、次にその人々達とお会いする時（いつまでもそうならないことを願うのだが）には、その人々達は・・・まさか、親の世代を差し置いて自分が。可能性はゼロではないが、物事には順序というものがあ。優先的に迎えが来るほど筆者は「善人」ではないし、選ばれる徳もない。

その人々達が待機時間に賑やかに話をしている。その人々達が決めるのであろう「次は誰」の声が微かに聞こえたような気がするが空耳か。それが談義所たる所以か。